

# 探検・探査

2号

1994年1月

横浜市立大学 探検・探査の会

# 探検・探査の会 会報誌 第二号

## — 目次 —

知床と私	会長 大野正夫	… 1
「探検・探査の会」との付き合い方	幹事長 小森享二	… 2
寄稿文		
いつでも挑戦できる体力を	宮崎捷二	… 3, 4
栃木の山との出会い	大槻英二	… 5-8
私の「探検部」以後	小森享二	… 9
ある探検部員の夜	松林孝憲	… 10
ヒッチしましょう	伊吾田宏正	… 11, 12
93年度夏合宿（無人島生活実験）を振り返って	稻田俊	… 13, 14
会員プロフィール		
会員の交流 はがきアンケート		… 15-18
研究会からの報告		
「フィリッピン群島研究会」の発足にあたって		
	世話人 小森享二	… 19
事務局からのお知らせ	事務局 川尻哲夫	… 20, 21
探検・探査の会 会員名簿		… 22-27
探検・探査の会 会則		別刷り折込
編集後記		



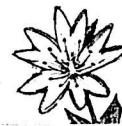
## 知床と私

会長 大野 正夫

年末に入って、久しぶりに国立極地研究所を訪れた。毎年1回開かれている南極観測隊の成果報告への参加であったが、16次、26次に参加した時の思い出に浸り、もう一度行きたくなった。年を取りすぎて、日本隊での参加は無理でなので、「飛行機でアメリカ基地でも行くかな」などと冗談を言っていたが、その会場で横浜市立大学の生物学科の先輩の加藤さんに30年振りにあった。ひとしきり頭の薄さを話題にしたが、その後は、「大野と知床に行ったなー」と懐かしげに話し出した。「古い話ですねー」と言うと、「世の中、暗い話ばかりでね。俺は新しい話はすぐ忘れるが、昔のことは妙に覚えているんだ」と自慢げにいった。知床は多分、彼の今あることの原点ではなかったかと思う。彼は2年生。私は、入学したばかりの1年生。卒業したのに生物教室にうろうろしていた有名人、丸山さんに知床に行かないかと勧められた。あまり希望もしていなかった大学に入ってしまったので、少々ふてくされて、面白い事はないかと生物教室を彷徨っていたのが悪かった。第4次南極観測隊員だった福島 博先生が隊長というので、ついにのってしまった。その頃の南極観測隊帰りの先生は、螢雪時代の大学案内に載るほどの人気があった。ということで、貨客船で東京港を出航して、1昼夜海上で過ごし、夜半釧路に上陸し知床に向かった。知床の原野を飲まず（水は凹地にたまつた雨水）、喰わず（持っていたパンは黴びて食べられない）の渡り歩き、小野田少尉型よろしく、ハイマツの枝を渡っていたのであった。苦しかったが、これが探検家と思い楽しくもあった。賢い加藤さんは、「こんなバカのすることに付き合えん」とその後、来なくなってしまったが、私は相変わらず丸山さんについてゆき、授業をサボリに探査会、探検部の発展に尽くすことになってしまった。その加藤さんが30年たって、しかも私以上に鮮明に知床の事を覚えているのは驚きであったが、彼にもバカバカシイこともできた青春が懐かしく、また‘つらい’ときに知床のことを思い出すのだろう。

いま我々がやっていることを、極めてバカバしく思う人もいるが、もっとも純粋な心と逞しい体力をもった者しかできない、人間らしい行動だと思えてくる。

## 『探検・探査の会』との付き合い方



幹事長 小森享二

私がOB会の設立に関わりはじめてからもう丸3年が過ぎようとしている。設立準備のための会合に最初に出席したのは確か91年1月であった。その時、母校を訪れるのは15年振りぐらいで、キャンバスの変わりように驚かされた。しかし、器は変わっても中味は昔と同じで、学生は私達の頃と大して変わっていないように思えた。あれから3年という月日が流れ、当時の一年生部員がもうすぐ卒業の年を迎えるようとしている。いよいよ彼らの巣立ちの時だ。そして彼らは社会人となり、それぞれ人生の目標に向かって学生生活、探検部活動に別れを告げる。しかし、彼らの探検部を通じての諸々の経験は脳裏に焼きつき、決して忘れ去られることはないとと思う。社会人になるとなかなか自由がきかなくなるものだ。学生時代の自由さが本当に恋しくなる。しかし後戻りすることは極めて困難であるし、それは諦めた方がいい。生活が変わって、時の経過が徐々に速く感じられるようになってくる。多忙な日々が続き、そして、ある日突然、探検部時代のことが思い出される。その時、「探検・探査の会」がいつでも君たちを待っていることを忘れないで欲しい。

ところで、ヒトはいつからノスタルジーを感じ始めるのだろうか。私の短い人生経験によれば、30代後半から40代前半にかけてノスタルジーを強く感じ始め、またそれを求めるようになるような気がする。個人差は多少あるかもしれないが、齢をある程度重ねていくうちに自然に生じてくる感情だと思う。はるか昔に卒業したOBの人達が探査会や探検部を忘れ難く、OB会に諸々の形で関与されることはノスタルジーを求める心が少なからず働いているようだ。現在、会員の最年長組が50才半で、中堅が40才前後。あと10年もすれば、会員を取り巻く環境も大きく変化し、活動は活発、拡大に向かうことは間違いないであろう。当初、OB会は現役部員の活動をサポートすることを第一目的として発足したが、これから将来、会員の数が増加するに従い現役への支援のみならず、OB会員独自の活動も活発化していくと思う。現在のところOB会員の気持ちと取り巻く環境とにギャップがあって活動面においてはまだ特筆すべき実績は上がっていないが、これから10年先には一変しているだろう。持続する意志が集合すれば、いつか必ず実を結ぶものと思う。

私達の日常生活は大体、仕事中心に展開されており、人間関係や付き合いは、ついつい仕事に関わるものに限られてくる。仕事上の付き合いは利害が絡み何か吹っ切れないものを感じざるを得ないが、一方、OB会の付き合いは何の利害関係もなく、ただ探査会、探検部で活動したという経験だけを接点とした集まりで実に気楽に付き合える。会合の後には大抵、飲み会をやるのだが、その時のワイワイガヤガヤの中にある会員の面々が真に屈託なく見えるのは、私の偏見では決してないと思う。

今のところ、会員数の割には会合への参加者や会報への投稿者はまだまだ少ない。しかし私は全く悲観していない。会員の中には会合に参加したくても諸々の事情で果たせなかったり、発表したくても筆をとる時間がないといった方々が多いと思う。また、入会者の中にはOB会と何か関わりを持ち続けていたいとか、縁は切りたくないといった動機で会員になった方も少なくないと思う。私はそういう会員の方々の意志を尊重したい。そこで、OB会員の方々に申し上げる。無理されることなくお付き合いいただきたいと。そして、志があればいつか行動に結び付く時がやって来ると。それから、二つだけ守っていただきたいことがある。ひとつは会員に情報を届けるためのミニマム・コストをまかなう会費の支払、そして二つ目は会のネット・ワークのキーとなる連絡先を常に明らかにしておいていただきたい。以上の二点である。

会合は年に数回開催しているが、遠隔地の会員の方々にはなかなか参加してもらえないのが現状である。もし出張とか、その他用事でタイミングが合ったら是非、参加してみていただきたい。余りに久し振りで躊躇されるかもしれないが、一旦キャンバスに足を踏み入れ、昔の仲間に会えば、一気にタイム・スリップ、心は探査会、探検部時代のあなた。そして、あの頃のことが打ち寄せる波の様に思い出されるに違いない。「探検・探査の会」は発足してまだ日は浅いが、会員の意志が持続する限りこれから何年も存続していくと思う。会員の方々には気が向いたら気軽に会合や活動に参加してもらいたい。要するに、「探検・探査の会」との付き合い方には特別な流儀など必要ないのである。

# いつでも挑戦できる体力を

1965年卒 宮 崎 捷 二

1950年代だろうか“探査会”が生まれた。卒業生と学生とが同時に所属する会になった。やがて、大学の学生の自治組織である文化部連合会の費用が、その運営費に使われるのは正しくないとの指摘がなされ、“探査会学生部”が分離した。その後1964年東京オリンピックの年、学生部が改名されて“探検部”そして“探検部OB会”という流れになっていた。勿論改名されたとは言え“探査会”として発足した当時からの冒険心・探検心精神は脈々と流れていた（ある人は探査会精神と呼び、ある人は探検部精神と呼ぶだろう）。しかし、各人が身をおいていたその時代の会の名称が、その人の精神構造を決めてしまい、“探検部”以降の人達には、あたかも全く別の組織のような錯覚を抱かせて推移してきた。だが理屈では割り切れない。ご承知のとおり糸余曲折を経て、統一名としての“探検探査の会”的誕生を見るに至った。

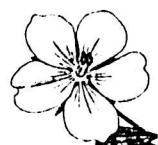
## ★ 飽く無き挑戦に勝利を ★

“いつでも夢を！”発足当時からの「中国揚子江源流調査」の夢は、まだ叶えられてはいない。何年前だったか、もう一步のところまで進んだ「中国調査」の計画は、何とも残念中国科学院の許可を得られず消えてしまった。登山のみなら許可がおよりる可能性ありとの執念で、探査会・探検部・山岳部を中心に（現在の名称の使用を遡って許して貰うなら、「探検探査の会」を母体に）「天山踏査の会」が組織され、’90年に「天山トムール峰登山隊」を送ることができた。チャンスはいかせと小生もトレッキング隊に加えてもらった。

頂上を踏めなかった悔しさ・3人の友を失った悲しさをバネに、弔い合戦の意味も込めて’92年再遠征が試みられたが、再度雪崩に追い返された。こうなると過去は1次・2次と位置付けることになろうか、’94年には「第3次登山隊」を送る計画が進められている。“探検探査の会”としては後援することになったが、出来得ればトレッキング隊を派遣し、全く別の行動組織の形で、日本からベースキャンプまでの輸送を費用の面から支援する計画をたてている（余裕があればシルクロード踏査もやりたかろう）。

## ★ チャンスをじっと待つ ★

小生は大学卒業以来、群馬県の高校教員の8年目から現在に至る22年間、山岳部の顧問を担当している。それは“探査会”関係の海外遠征のチャンスがあったらいつでも加われるよう、“探査会精神”をもち続け、仕事の利を生かして対処していく



たと言っても過言ではあるまい。しかし、所詮高校の登山部、岩や氷壁登攀をやる訳ではない、尾根歩きを主体とした山行だ。とは言え自然界が、そしてまだ未熟な生徒が相手だ、何が起こるかわからない。群馬高体連登山部は指導顧問の資質を高めるため、冬山・夏山・秋山指導者講習会を計画し、岩や氷壁登攀・雪上歩行・滑落停止訓練等を実施している。やる者がいないので仕方なしにと、だが徐々に山に気持ちを寄せるようになってしまった顧問山男達の夢だってある。1980年以降、インドヒマラヤにトレッキング隊・6000m級登山隊を3回にわたって派遣している。小生も1回目・3回目の遠征に加わることができた。

### ★ いつでも現役でなくては ★

遙か遠くから叫んだり、双眼鏡と無線機であっちだこっちだと指示する訳にはいかない。山岳部の顧問は、他の部活動の顧問と違って常に現役でなくてはならない。生徒と同じく不断のトレーニングが要求されるのだ。小生は年間1200km（1カ月100km）を目標に走り込んでいる。

我が高校山岳部の1年間のスケジュールは次のとおりだ。4月：新人歓迎登山、5月：県高校総体登山大会、6月：月例登山、7月：夏山準備登山、夏山合宿登山、9月：月例登山、10月：集中登山大会（新人大会）、11月：関東登山大会、12月：雪山基礎訓練、3月：リーダー講習会（雪山講習会）。顧問対象には、6月：夏山指導者講習会、9月：秋山指導者講習会、2月：冬山指導者講習会が設定される。

小生のこの1993年を振り返ってみる（キーは除く、※は生徒引率）。

2.18~20 尾瀬富士見峠アヤメ平 (冬山指導者講習会)	4. 4 尾瀬富士見峠アヤメ平	5. 4~ 5 榛名山（新人歓迎）※	5. 7~ 8 榛名山（県総体コース調査）	5.15~17 榛名山（県総体）※	7.10~11 富士山	7.29~ 8. 3 北アルプス表銀座 (夏山合宿：槍ヶ岳、奥穂高岳、涸沢岳、北穂高岳) ※
----------------------------------	-----------------	--------------------	-----------------------	-------------------	-------------	---

8.10~11 富士山	8.17~18 立山三山	9.28 筑波山※	10. 3 尾瀬ガ原（鳩待峠）	10.24 尾瀬ガ原（鳩待峠）	10.28 丁須岩（裏妙義山）	12.26~27 土樽（雪山基礎訓練）※
◆ 富士山や尾瀬については、友人達に請われて案内をするのが殆どである。						

群馬県と言えば、谷川連峰・上州武尊山などがあり、温泉あり、スキー場あり。探検探査の会の合宿など計画してみても楽しいではないですか。個々人でもご案内します、ご一報下され。

# 栃木の山との出会い 大槻 英二 (89年3月卒)

1993年10月19日、正午のNHKニュース。「ヒマラヤの未踏峰トウインズ(7350㍍)で、東京農大山岳部OBの佐藤正倫さん(30)がクレバスに転落」の一報が入る。出身地が栃木県氏家町だということで、実家へ「両親の悲しみの表情」の取材に走る。

また、先鋭的な登山家が山で遭難した。両親は「この日」を覚悟していたのか、淡々と、わが息子のことを語ってくれた。「あの時、辞めさせでなければ」「なぜ、ザイルを結んでいなかったのか」。こんな質問ばかりを浴びせる他社の記者を尻目に、帰り際、息子のことをどう思っているのか、そっと聞いた。父親がポツリと、つぶやく。「好きな山登り一筋でやってきたんだから、息子は恵まれていますよ。登頂できなかつたのは残念でしょうが……」。

支局に車を走らせながら、考える。「山で死んだ者を英雄に祭り上げていいのか。批判すればいいのか。好きでやったことと無視すればいいのか」。記事では、母親が今回の登山に限って、お守りを渡せなかつたことをメーンに書いた。デスクは「山男は、お話しになつていいねえ」と、冷ややかな笑みを浮かべた。

たまたま、前夜、読んだ「山と渓谷11月号」で「平成の登山界をクリエイトする13人の横顔」の一人として、佐藤さんが紹介されていた。記事中に、こんな発言がある。

「このところ海外登山が続いていますから、来年は少しひと息いれようかとも思っています。ときどき、今の状況に不安を感じることがあるんです。流されているんじゃないだろうかと。つまり流されているということは、危険に対する感覚が麻痺してくる、山登り

自体がもつ新鮮な感動が麻痺してくることだと思うんです。メリハリをつける意味でもワンクッションおいてみたいんです」

両親の話でも、お盆に帰ったとき、弟に「来年4月から、そろそろ家に戻るから」と、耳打ちしていたといい、今回の登山は、心に迷いを感じながら挑んでいたことがうかがえる。

\*

\*

\*

植村直己、関野吉晴……。先鋭的な探検家たちの生き方に憧れを感じるが、自分は、そうはなれないなど、少しあきらめの気持ちもある。しかし、26歳。体力的にハードなことに挑むには、最後の決断の時が迫っていると実感している。

わたしが、いま、探検のイメージとして思い浮かべているのは、一度登られた山を冬季に難しいルートから登るというようなものではなくて、何人が通過したところでもいいから、新しい視点で臨む「旅」的要素の強い遠征。単独でもいいが、できれば、板前さん、民族屋さん、絵描きさん、お医者さんなど、それぞれの専門屋からなる4、5人のパーティーがいい。わたしは「フォト・ジャーナリスト」として参加したい。

\*

\*

\*

地方記者生活5年目。休日も「県内」というエリアに縛られ、連休も取りにくいなど、最初は窮屈さばかり感じていた。そろそろ異動も近い、と察した昨年あたりからは、努めて県内登山を楽しむようになった。

考えてみれば、栃木県には探検部に入って初めて本格的な登山を経験した奥日光・白根山や皇海山など、思い出の山々が連なる。男体山（表裏から3回ずつ計6回）、女峰山、那須岳、白根山と、月

一回一山ぐらいのペースで登っている。なんせ、休みの日に、少々、寝坊しても、一時間ちょっと車を走らせればアプローチできるという、恵まれた環境なのだ。

日帰りで帰ってこられるぐらいで、静かで自然豊かな山が多いのも、ちょうどいい。東京で、あくせく働いて疲れるよりも、おおらかな地方生活の方が、よっぽど快適だと感じているきょうこのごろでもある。ゴルフをやらない替わり、山登りで人間関係を広げられるという利点もある。

\*

\*

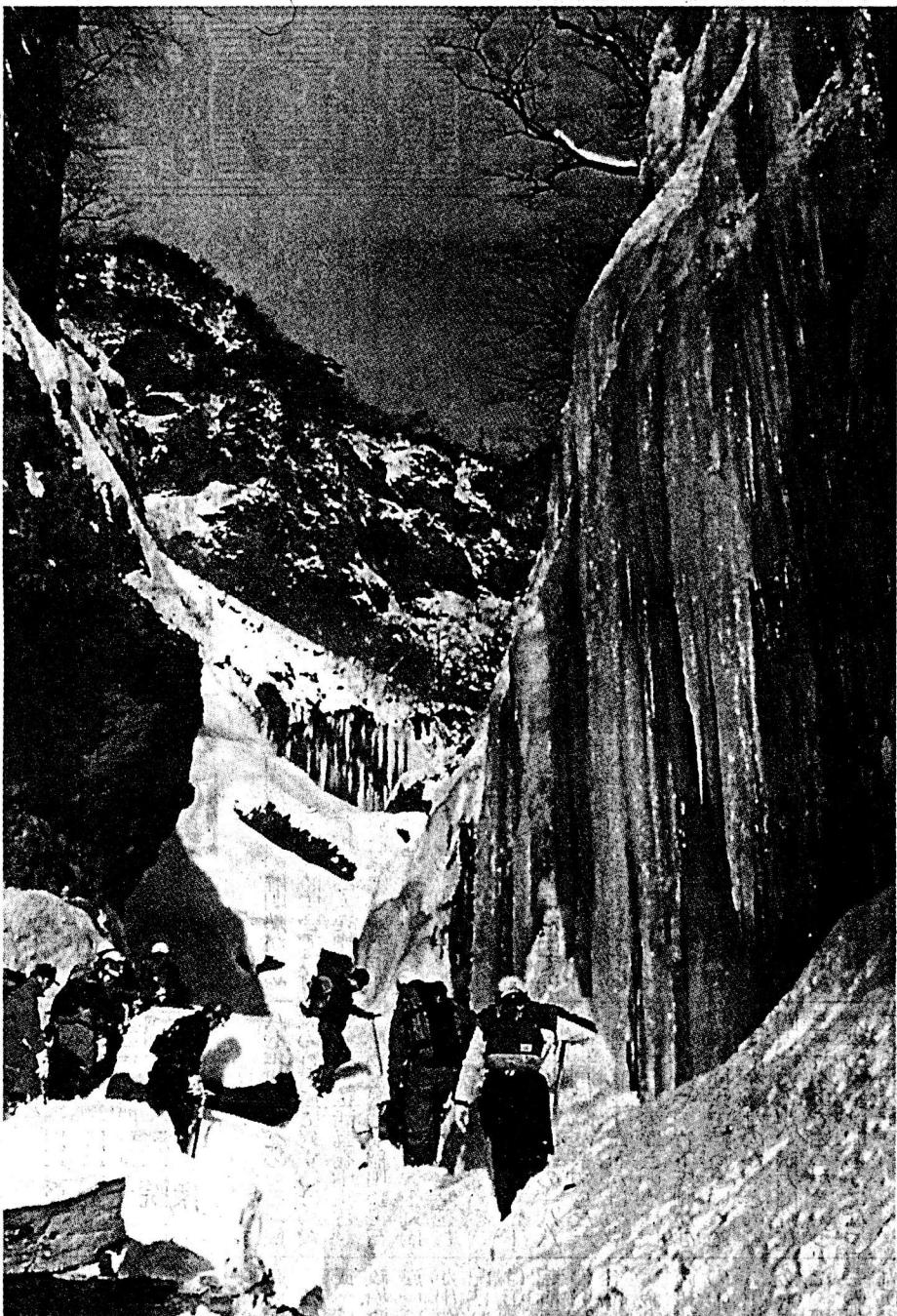
\*

次ページの新聞記事は、今年1月31日に日光市の山岳救助隊に同行して、雲竜渓谷の取材に行ったときのもの。支局からはカラー電送できないため、撮影したカラーフィルムを東北新幹線で東京本社まで運んだ。

この日は、後に話題になる写真部の「矢負いガモ」の写真と競合したが、「足で稼いだ」努力が報われて一面のカラーを飾り、地方記者としては異例の写真部長賞を受賞、金一封をものにした。

(1993年10月19日、宇都宮支局で)





# 巨木ツララに挑む

日光

日光国立公園・女峰山（標高二四六三メートル）の南東に切り込む雲竜渓谷に、今年も十数近くある巨大なツララが出現。栃木県警日光署と日光市山岳遭難防止対策協議会は三十一日、一四〇メートル付近の同渓谷で、パトロールを兼ねた雪山訓練を行った。（写真）

先週、寒気団がもたらした雪で積雪は一倍と深いが、暖冬のため氷のつきは悪く、岩壁からぶら下がるツララは例年より幾分スリム。日が差すと「ガサリ」と音を立てて崩れ落ち、鋭利な剣先が地表に突き刺さる。

同渓谷にある落差百五十メートルの雲竜瀑布では幾重にもツララが折り重なり、シャンデリアのような彩りを見せている。クライマーたちがピッケルを突き刺し、氷瀑登りに挑んでいた。

68年入学 小森享二

私は今から21年前、1972年に卒業し、「探検部」での活動にも別れを告げた。しかし卒業してからも探検部時代のことは常に意識から離れず、「探検部」を経験していなかったらあり得なかつたであろうと思われる出来事を今までに幾つか体験してきた。他のOBの方々にもそれぞれの語り尽くせない「探検部以後」がある訳で、先ず私がそれらを引き出す呼び水にでもなればという気持ちで、私の「探検部以後」について今回、本誌に発表してみようと考えた。そこで第1回めとして、原稿用紙3枚の作文で「4日間のガム島旅行」をプレゼントされた話。

卒業2年目、サラリーマン生活にも慣れてきた頃、衣料品ショップのウインドウに「私のフリーな4日間」論文募集!!入選者には4日間のガム島旅行プレゼント!!と書かれたポスターが目にとまった。とにかく何でもいいから出せば、もれなく粗品をくれるという。ただそれだけの理由で応募要項のパンフレットをもらっておいた。

その後、暫くその作文のことは忘れていたが、ふと思い出した時には締切りが間近であった。何を書こうかと考えていたが、突然閃いた。探検部時代にいつかやろうと心に描いていたこと、「長良川の単独川下り」よしあ、これを書こうと一晩で一気に書き上げ、翌朝、速達で原稿を送った。

それから3ヵ月後、忘れていた頃に一通の封書が届いた。殆ど期待もしないで封を開いた。そして中から出てきたのは論文入選の通知であった。それから1ヵ月後、私は会社から有給休暇をもらい他の入選者3人(全員大学生)と共に4日間のガム島旅行を楽しんできた。ガム島旅行は単なる観光旅行であったが、そこ今まで至る過程において探検部時代のことが多分に影響を与えたと思う。

下にあるのがその時の作文(「メンズ・クラブ」74年1月号掲載)である。その中で現在、環境保護で全国的に問題になっている長良川の自然破壊について言及しているが、当時の首相・田中角栄が「日本列島改造論」をぶち上げていた。まさか20年後にこのような問題に発展していくようとは思いもよらなかった。

まず、フリーな4日間を確保しなければならない。私の勤める会社は隔週土曜休日だから金曜と月曜に有給休暇をとる。これで4日間会社から解放されフリーになれる。さて、私が計画しているのは長良川(岐阜県)をファウルト・ボート(一人乗りのカヌー)を使って上流から河口まで約120kmを4日間で一気に下ろうというものである。

何故、私は長良川を選んだか。現在、ダムも無く、全く自然のままになっている一級河川は全国に殆んど無い。そして将来は全ての一級河川に「日本列島改造」の手が延び、自然のままの河川は皆無になってしまってある。長良川は現在、ダムの無い数少ない一級河川のひとつである。私の住んでいる名古屋市から長良川の上流の支流にある吉田川(郡上八幡町)までは列車で約2時間半と地理的に近く、4日間という限られた時間を有効に使うことができる。また、上流から河口までの景色の美しさは筆舌に尽し難いと言われている。以上3つの理由から長良川を選んだ。

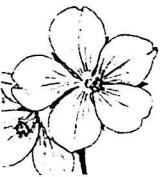
さて、次は装備の方であるが、ファウルト・ボートは折りたたみ式の持ち運びに便利なものを使える。それからボートに乗る際の必需品であるバドル・ヘルメット、ライフジacket。テントはかさばるので、シュラフ、エアーマット、ポンチョで代用する。あとはナイフ、固体燃料等炊事、用具一式。次は食料であるが、小さなファウルト・ボートであるから多くは積み込めない。極力、インスタント食品(乾パン、ビスケット、チーズ、チヨコレート等持ち運びに便利でしかも実費便益の高いものを準備する。木曜の夜、ス

小森  
享二  
二十四才  
会社員  
愛知県

タート地点の郡山八幡町口指して名古屋を出る。その夜は吉田川の河原にビバークし、夜明けを待つ。夜明けと共にボートを組立て、ライフジャケットを身につけ、ヘルメットをかぶる。胴体にはロープをしばりつけボートにつなぎ、転覆した場合にボートだけが流れないようにする。いよいよボートに乗り込む。

男の冒険には誰の見送りも必要ではない。河口を目指して出発だ。細い吉田川を徐々に下り、長良川の本流にさしかかる。ここは相当な急流で油断しているとアツという間に転覆してしまう。ボートのバランスをとりながらバドルを握り一気に下る。ようやく急流を過ぎたら次は岩場の多いところである。ボートに傷がつかないよう慎重に下る。緊張でバドルを握る手が汗ばんでくる。岩場を抜けると流れの緩やかなところに来た。ボートを岸に寄せ、昼食にする。コーヒーとビスケットで腹ごしらえをし、少し休息する。再びボートに乗り込む。さて、これから河口までのような急流が待ちかまえているだろうか期待と不安が胸でふくらむ。河口を目指して「さあ出発だ!!」。

**campux**  
ガム島招待  
**入選論文発表!!**  
テーマ  
**私のフリーな4日間**



## ある探検部員の夜

松林孝憲

最近、夜なかなか眠れない。どうしても明け方近くまで起きてしまう日々が多い。寝ようと思えば眠れるのだが夜になるとなぜか興奮してきてベットに入つても目がさめてしまう。そう言えば北アルプスの上の廊下にいったときもなかなか眠れなかつたことをおぼえている。不眠症なのだろうか。いやそんなことはない、極度の眠気に襲われたときはちゃんと眠ることができるし精神が病んでるともおもえない。ただ言えることは夜空が私を引き付け、暗闇に包まれながらさまざまなことを頭にめぐらせることができるのは精神が病んでるともおもえない。ただ言えることは夜空が私を引き付け、暗闇に包まれながらさまざまなことを頭にめぐらせることができるのは精神が病んでるともおもえない。

なかなか眠れない分暇そうに思えるが実はそうではない。なぜなら夜になると昼間隠れていた世の中の魅力がいっせいに顔を出すからである。そしてその中で一番魅力的なのが、なんといっても夜空であろう。黒い紙に数かぎりないほどの豆電球をつけそれを天高く貼り付ける。そう、この作りもののような夜空の持ち主が、我々探検部がいった宇治群島であった。あんなにすごかった星空は今まで見たことがなかった。見るまではその存在さえ疑いかけていた天の川が眼前にまでせまっていたのがいまでも忘れない。しかし今いるところではあのような星空を見ることはとうてい不可能である。そのかわりといってはなんだがここには月がある。もちろん宇治群島の上にも月はあったが、星のすごさとあまり月の光が反射するものがなかつたためかで、月は役割不足あまり印象に残っていない。だがここはちがう。月の顔がでている日は月の淡い光で見なれた景色を優しく包み今までとは違う体験を私にさせてくれる。そして部屋の中では、太陽とは違った明るさでみちあふれてしまう。また夜の街をぶらつくときビルの谷間に月を見つけるとうれしくなり不思議な感じになってしまう。私や星の光の届かない都会にとって月とは、なにもかもきれいにする役割をもつているのであろうか。しかしこれらの夜空が私の心を揺さぶるときがある。それは昔の彼女の「あなたと一緒に夜空を見たかった」という別れる時の言葉で……。これが眠れぬ原因の発端なのかもしれない。

1993年入学 商学部1年



## ヒッチしましよう

伊吾田 宏正

ヒッチハイクというものは難しい。同時に簡単で、そのどちらでもない。私はこの夏、合宿の集合地、鹿児島へ単独ヒッチで行こうと企てた。距離にして1500km位であろうか。しかし私は失敗した。ヒッチハイクは難しいのだ。出発点は東名東京インター。料金所へむかってラーメン屋などの立ち並ぶ路上、私はザックをしょってヒッチを始めた。もう、ごうごうと長距離トラックが走っている。私は紙に、「九州方面」と大書して臨んだ。ああ、これが浅はかであった。トラックのナンバープレートを見ると九州への車は思ったより多かった。これが、私を楽観させすぎた。これなら九州の一発狙いも夢ではないと思ったのだ。

数時間後、私はまだ、その路上に立っていた。私はヒッチの最終目的地が遠い場合、無理なくコマメに前進するのが定石である。つまり私は、あのとき、紙に大書する都市を名古屋や大阪にすべきだった。結局その日は5、6時間も粘ったが拾ってくれる車はなかった。おまけに雨が降り、寒くひもじく、すっかり自信を無くした。

もう一度明日、挑戦しようと思って、その晩は近くの公園で野宿することにした。公園に向かう途中、屋台のおでんやがあったので寄ってみた。お酒を冷やでもらい、ラーメンをすすると、店の親父は「ヒッチしてんのかい」と聞いてきた。そしてすかさず「その顔じゃだめだ」と言った。親父いわく、私のようなむさくるしい野郎なんて今のゴ時世拾ってくれる物好きはいないそうだ。けれども親父は面白い人だった。そこで彼はヒッチハイクの哲学というものをトウトウと語りだした。「いいかい、学生、ヒッチハイクというのはケチな考え方でやっちゃいけない。大事なのは誠意さ。そうだなぁ、拾ってもらったら、食事代ぐらい出させてくださいって言うのが筋ってもんよ。そうすりゃむこうだって、可愛い奴じゃねえか、めしぎらいおごってやるぜって話にならあな。」そう言ってオヤジはタバコに火をつけた。ああ 私は反省します。誠意が大切んですね。私は去年の夏、北海道をヒッチでまわっていた。そこでは、ヒッチの入れ食いで、乗せてくれた車は、大抵めしをおごってくれたのだ。私はそれで味をしめ、今回おごらせてもらうどこか、おごられるのが当たり前だと思っていたのだ。オヤジは続ける。「学生よ、ヒッチやる奴は金がない。お前さんもどうせ金がないんだろう。めしをおごる金がないんなら、せめて運ちゃんの住所聞いて、礼状のひとつでも書くんだな。でなければ、ヒッチハイクの神様に嫌われるぜ。」はぁ驚いた。ヒッチハイクに神様がいたのか。私はこの世に神様がいるかどうかは知らないが、このヒッチハイクの神様なら、何か存在しそうな気がしたものだ。全く、おやじはいいこと言う。「まぁ頑張るんだな、かえってきたらまた寄んな。」

次の日。その日は休日で、長距離トラックはいないと、オヤジに聞いた。それでも一時間やってみて、やっぱりダメで、集合日までの日程も限られていた

ので、すっぱりあきらめて、青春18切符で夜中、着いたのが蔵の街倉敷。明朝、少し街をぶらついて、午後から再びヒッチハイクを始めた。ここから先是快進撃であった。その日一息で熊本着。その次の日には鹿児島に到着していた。まだ集合日まで数日残っていたので、鹿児島散策を楽しんだ。

無人島合宿終了後、四万十川ビニールボート下りをすらりと成しとげ、私は再び、個人的に九州へ舞いもどる。博多で中学からの友人Iと落ち合い、ここからヒッチハイクの後半戦がそのヒヅタを切った。

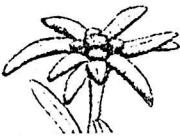
今度はヘマはしなかった。ペロリと長崎に進んで、そこは居心地のよい街だったので、3日程滞在した。とうとう横浜へ帰る頃になり、最後のヒッチを始めた。一気に広島、翌日は京都（友人Iは大阪で降りた）。翌日東名東京インターに到着し、これで西日本はヒッチで総ナメしたことになった。これであと青森までやれば、ほぼ日本列島がつながる。

どうも、全国の私を拾ってくれた方々、ありがとうございましたの気持ちを込めて、私はそれぞれの方に礼状を書いた。私は主に高速道路を使ったので、長距離トラックの運ちゃんが多くいた。彼らは豪快で、人情味にあふれている。その他、営業の車も拾ってくれたりした。ドライバーの方からいろいろ興味深い話を聞くのもヒッチのダイゴミのひとつである。そしてなにより、左手の親指をかざして、車が止まってくれた瞬間の、なんともいえないヨロコビは言いようのないものである。

さて、私は終点の東名東京インターの、あの屋台のオヤジを旅の終わりに尋ねた。けれども、屋台は休みで、オヤジとは会えなかった。しかたなく、置き手紙を残して、その夜は家路に着いた。私は未だ、その屋台に行っていない。

1992年入学 生物2年





## 93年度夏合宿（無人島生活実験）を振り返って

稻田 俊

### 1) 企画決定まで

93年度の夏合宿案として浮上した企画は、屋久島沢登り、四万十川イカダ下り、日本カワウソ調査、剣立山沢登りミックス縦走であり、そのなかの一つとして無人島もあげられていたが、無人島という言葉がもつ魅力のため何人かの部員がそこに相乗りした。その結果、無人島と屋久島沢登りの二案が残り、両企画を平行して進めながらどちらか一方にまとめる作業がおこなわれた。しかし無人島企画者のみではなく、部員全員の認識が漠然としたままであったため、企画を具体的に進めることもできず、また一方の企画の人々を説得するにも対立するにも不透明であった。

そのため、何を無人島とするかから、部員それぞれが抱いている無人島観に至るまでを話し合い、それに似合う場所、期間、行動形態などを探っていくことで企画を進めていった。

### 2) 場所

話し合いの結果から、いくべき島は「定住者がいらず、観光客がこない島」と決定したため宇治群島（鹿児島）、男女群島（長崎）、前島（沖縄）の三案が候補として残った。経済的理由から男女群島が、渡嘉敷島に近く人が頻繁に訪れるという理由で前島が候補から外された。宇治群島は向島と家島の二島からなり、地形は厳しいものの1967年に学術調査で市大探検部隊が訪れている向島を第一目標とし、避難港がある家島を次候補とすることとした。

### 3) 生活形態

部員各自がそれぞれ無人島生活に関して話し合う過程で、そこに求める生活は全く異なることがわかった。基本的に沢登り案の人間はサバイバルを望まないため、その違いを尊重する形態を取ることで彼らの取り込みをはかった。また共同生活期間を設け、そこでベースキャンプの整備、ルート作り、緊急時の対処等を行うことにした。

### 4) 期間

無人島生活に精神的な実験を望むものもいるため、期間は2週間以上必要という声が多く、結局3週間（21日間）に決定した。

### 5) 安全対策

最も議論に時間を費やした問題であった。今回の合宿の趣旨が個人の自由に任せると多いため、そことの折り合いが問題となった。島では個々に生活する可能性が高いため、集合による安全確認として3日に1度B.Cに集合し、情報交換と3日分の天候確認をすること、3日間を越える行動をする際にはバディシステムを取ることを義務づけた。また船舶電話をレンタルし、緊急時にはそれを使用すること、事前に海上保安庁、島を管理している笠沙町役場に計画書を提出することにした。

## 総括

最近の夏合宿は既製の合宿の形とは異なるものを望む傾向にある。今年もその流れを受けてか、通常とは少し異なった議論が部会の中で進められていた。「何をそこで行うか」という議論から行われたことは異質と言えば異質であろう。しかしその議論の流れは手探り状態であったとはゆえ、不確実な自分たちの足場を固めていったものであった。その結果、生活形態のほとんどが個人の自由に任せるということに落ち着いたのは自然の流れであった。反省すべき点はその議論の中になく、その議論が実際の場において遂行されなかった点にある。

第一候補であった向島を船上から見てそこへの上陸・行動は無理と決定し、第二候補の家島に向かったのは仕方のないことであった。しかし家島は避難港に毎日のように漁船が寄港し、時には観光客がくる場所でもあった。それがわかった時点で部会での趣旨を守り、当初それぞれが抱いていた無人島觀に近づくような状態に再設定する努力が行われるべきであった。一見愚挙のようにも思えるが、漁師の人から魚をもらわない、避難小屋で生活をしないなどである。それをする事なく無人島生活に入ってしまったため、各自が望んでいたはずの孤独下での心理変化、限りなく自給自足に近い生活といった状況が失われてしまっていた。

この問題は個人の資質による面が多分にあるということは間違いない。しかしそのような資質をもつ人間であるからこそ、あえてその資質に反した状況に置かれたいという気持ちからきていたはずであるこの合宿の意義を見失っていたことは非難されるべきであり、考えるべき問題である。

しかし今回の合宿は生活実験と銘打っているだけに、かなり普段の我々が行っている活動とは違ったアプローチからの議論、準備そして合宿そのものが楽しめたように思える。まさに合宿自体大きな実験だったとも今考えるのは楽天的すぎるであろうか。

1991年入学 文理学部3年 1993年度探険部部長

## 会員の交流

## アンケート

会員どうしの親睦と交流の助けにするためにはがきアンケートをお願いしました。協力ありがとうございました。以下の通りです。

成田佳紀氏

1、 探検部活動の中で印象に残っていること

台湾蘭しょ島調査、宇治群島探査

2、 現在興味を持っている事

台湾の大型哺乳類の生態学的研究（現在は分布調査をやっています。）  
台湾少数民族の文化及び言語

3、 これからやってみたい事

台湾の山岳地帯で幻の「雲豹」（ウンピョウ）を写真に撮る事

台湾台東の巨石文化の調査、洞穴調査

4、 について

7月22から8月30日まで又台湾に出かけます。今回は金門島に渡りカワウソを調査する予定です。

児玉泰子氏

1、 について

夏合宿の南ア縦走です。

2、 について

オフロードバイク、カヌーツーリング、山スキー等

3、 について

上記を日常で プラス モンゴル、中央アジアの旅をしてみたいです。

4、 について

学生の皆さんへ 今の自由な時間を大事にして思いきり遊んで下さい。

種子田幸太郎  
美和氏

1、 から3までについて

学祭



- 4、について  
学祭いくぞ
- 大下好憲氏 1、について  
先発（確認・調査）で台湾へ二週間行ったこと
- 2、について  
ATB・ロードレーサー
- 3、について  
ぶらり族
- 鴨原佳子氏 1、について  
一年の時の夏山合宿（南アルプス縦走）
- 2、について  
ボランティア活動
- 3、について  
国際交流
- 4、について  
社会に出ても、地道に活動をしているOBがいることは、素晴らしいことだと思います。これらの活動や、私達の生き方が、世界の平和につながりますように。
- 名前 ?氏 1、について  
冬山合宿、幌尻踏査など
- 2、について  
東南アジア諸国との共同研究
- 3、について  
上と同じ
- 4、について  
老若男女を問わない楽しい会を設けてみませんか（山あり温泉ありのところで）
- 鈴木元章氏 1、について  
昭和55年4月から本格的に活動を再会したが、特にその5月の青木ヶ原は、それこそ本当に肝試しであった。いずれにしてもここから始まった。

2、について

仕事、ラクビー

3、について

田舎の山奥に小屋を建てたい。また、山道具もあらためて買い集めたい。

4、について

平成5年4月1日より勤務先（人事移動）が変わっております。（新）横浜市役所 衛生局医療対策部 病院事務課（担当係長）（旧）横浜市役所 企画財政局財政部資金課

小森享二氏

1、について

1969年2年の時最年少隊員（19才）として第三次フィリピン隊に参加。しかし所期の目的地であるスールー諸島へは、渡ることができず。そして1971年4年の時、第四次隊を組織し、スールー諸島での調査を実現できしたこと。

2、について

1993年7月24日、明日、勤続20年に伴うリフレッシュ休暇（2週間）を使って北欧に一人旅に出ます。20年以上勤務してやっともらえた休暇。会社勤めをしている間は余裕はない。しかし将来のため準備しておくことは大切。「探探会」はその為です。

3、について

「探探会」にずっとかかり続け、仲間といつか将来、長期の海外探検をやりたい。三人の娘を成人させた後（10年後）には1年間を東京を拠点として沖縄、マレーシア、オーストラリア、コスタリカ等を点々としながら暮らしたい。

4、について

我々市大探検部とも若干の関わりのある本多勝一氏の「週間金曜日」協力していただきたい。

紙村 徹氏

1、について

第三次パラワン島探検隊を組織し実行したこと

2、について

パプアニューギニア、セピック丘陵（セピック河南部奥地）の系統的文化人類学的調査を実現すること。

3、について

同上、（当分、この仕事に取り組む）特に、一度、セピック丘陵から中央高地エンガッカへの未踏査のルートを歩いてみたい。

4、パプアニューギニアの調査探検に参加したい者を募る。  
フィリッピン・ジャーニーはいつでも参加するぞ。

宮崎捷二氏

1、について

大学四年間の活動 1年時 北上川調査 2年時 北海  
道扇原調査  
3年時 伊豆新島地内島鵜利根島調査 4年時 男女群  
島初調査みなおのとの異なる印象。

2、について

南米パタゴニア探検、コンロン山脈探検

3、について

同上

4、について

現在、昨年夏インドヒマラヤのストックカンリ峰報告書  
作成中です。8月末には完成の予定、是非沢山の人に読  
んで欲しいと思います。後日、詳しくはお知らせします。



## 事務局からのお知らせ

1 探検・探査の会（略称「探探会」）も発足2周年（第1期終了）を迎えることができました。これから第2期目に入り、いよいよ具体的な活動に着手いたします！

- 「O B会はいつまで続けられるだろうか？」そんな自問自答を繰り返しながら、東京西多摩方面から金沢八景迄の片道3時間を使へ20数回往復した3年間でした。正直言って、仕事と家庭のバランスをとりながら（時には犠牲？）のO B会活動はキツイものですが、“できる者があせらず一歩ずつ”的気持ちで事務局を務めさせていただいています。
- O Bの皆さんの中には、“できれば自分も活動に参加したいのだが、今は仕事・家庭・その他の理由で何もできない。しかし、いつかは…”との思いの方が数多くいらっしゃることでしょう。それで結構です。直接O B会活動には参加せず、名前だけO B会に入会されていても、私たち幹事役の者には心強い味方と思えてきます。
- でも、もし、ちょっと時間に余裕があれば、定例会への参加や会報誌への寄稿などをしていただければ、もっとO B会の組織は強固なものになりますが、マアそれぞれできることからやってみましょう。
- さて、会の発足後2年が終わり3年目に入ります。幹事は1期2年で改選ですので、新しい、或いは継続の幹事の方が総会で決まります。この2年間は組織固めで終わりましたが、いよいよ具体的な探検活動に踏み出す時期となります。事務局としても、もう少しスピーディで確実な事務体制をとることが本来の活動への支援となるものと考え、内部管理の見直しも今期の目標といたします。

## 編集後記

手づくりで会報誌第二号ができました。

創刊号に引き続いて「みんなでつくろう」の編集方針で、執筆者にB5版でワープロ打ちして、原稿を送ってもらいました。原稿を送っていただいた方にその都度連絡をしませんでしたが、ありがとうございました。ここで感謝いたします。なお、文中のカットの花（高山植物）は、編集部で入れたものです。

今年の夏は、天山登山の後援、トレッキング隊派遣の計画等、会としての動きもある年になるかも知れません。

この会報誌が、会員の親睦と交流に役立ち、これから会の発展に大いに活用されますよう期待します。なお、創刊号もそうでしたが、会報誌の印刷に市大の高松氏および探検部学生の協力をお願いしました。ありがとうございました。

終わりに、今年も会員のみなさんの健康とご活躍をお祈りいたします。  
(河合)

### 探検・探査の会 第2号

発行年月日 1994.1.29

編集発行者 横浜市立大学

探検・探査の会

代表 大野正夫

編集委員 河合・高松

大原・立木